社会発展論の論理構造
——コントとマルクス——

村　井　久　二

「過去，現在，未来というかわりに，過去，未来，現在というべきである。」[1]（オーギュスト・コント）
「（合理的な姿における）弁証法は，現存するものの肯定的理解のうちに，同時にその否定の，その必然的没落の理解を含み」「その本性上，批判的かつ革命的である。」[2]（カール・マルクス）

序

〔1〕 人間社会がこれ迄種々の形態転化を遂げてきたということは，あらためて証明する迄もなく，きわめて明白な事実である。ところでこのような転化は，たんなる転化（文字通りの飛躍）としてもとらえうるが，発展（Entwicklung）として，すなわち連続的に成長していくものが，既存の形態を破棄して，そのうちに潜在していた新しい形態を顕現させそれを樹立していく過程[3]，としてもとらえうるであろう。筆者は，社会諸形態の継起についての後者の見地をもって，社会発展論（的見地）と呼ぶが，本稿はこのような意味における社会発展論を代表する二つの学説，すなわちコントとマルクスのそれをとりあげて，その論理構造を解明したものである。

さてここでとくに論理構造に焦点をあてるのは，今日，コントやマルクスの社会発展論の経験的内容のみならず，それをささえていた思考様式（論理構造）それ自体をも疑問なものとみ，それをいわば「前科学的思考」として断罪せんとする潮流が厳存しているからである。このような傾向を代表する人物は，周知のようにカール・ポパーであるが[4]，本稿はこのような傾向に対する反論を意図するものである。

又とくにコントとマルクスをとりあげるのは，結論を先取りしていえば，両学説は，その経験的内容こそはきわめて対照的なものであるけれども，その論理構造にかんしては，むしろ基本的に同一だとみることができるからである。したがって両者の比較は，われわれが一方だけをみていたのでは（経験的内容と論理構造とが一体化しているために）明瞭には識別しえない論理構造を，まさに浮きぼりにしてくれるという効果を有するのである。

ただしここでありうべき若干の疑問に，前もって答えておくべきであろう。まず第一にわが国においては，コントとマルクスは，たとえば科学は因果認識であるのか否かといった最も基本的なレヴェルの問題で，すでに対立していた，とする理解が支配的である。たとえばマルクス学派の立場にたつ芥川集一氏は，コントは「法則と因果性とを対立させ，後者を排除」することによって因果分析という「科学の本筋を踏み外し」[5]てしまった，と批判している。しかしもしそうであるとするならば，われわれが，社会発展論におけるコントとマルクスの論理構造の同一性なるものについて語ることは，最初から無意味なことになるであろ

う。しかしコントについてのそのような理解は正しくない。J. S. ミルはこの点について次のように述べている。「コント氏は原因の探求を拒否した，としばしば言われている。しかしこれは言葉の正しい意味においては真理ではない。というのは氏が拒否したのは，究極的起源の問題，いわゆる自然的(フィジカル)原因から区別される所の，動力因(エフィシャント)の問題にすぎなかったからである。」「氏は他の人々と同じように，一つの自然的な事実が，他のそれの原因でありうるという意味における原因の探求にかんしては，これを認めている。ただし氏は原因という用語を非難して，継起の法則について語ることのみに同意した。」(6) すなわちコントにとって，原因という言葉は，第一原因という意味と不可分なものであるように思われた。そこでコントは，通常の意味での因果分析を排除することは決してなかったのであるが，原因という用語にかんしては，これをあく迄も排除した，というのが事の真相なのである。

第二に，コントはもっぱら「継起の法則」(ならびに「類似の法則」) について語ったが故に，コントには，先に述べた意味での社会発展論的見地が欠如しているのだ，という一般的印象がもたれている。すなわちかれの有名な「三状態の法則」は，諸状態のたんなる継起を概括したものにすぎない，というのである。しかしこれははなはだ皮相な誤解にすぎない。コントは「人間生活は，決して本当の意味の創造を行なうことがなく，つねにたんなる段階的進化を示すだけである」(7)と述べた。すなわちコントによれば，諸状態は表面上は継起するものとしてあらわれるが，それは実は最初の状態のうちに含まれていたものの展開過程なのである。それは語の本来の意味における発展法則であった。このことの詳しい証明は本論に譲るとして，最後に以上二点のまとめとして，コントの次の言葉を紹介しておくことにしたい。すなわち「社会動学の真の一般精神」とは「『現在は未来を孕む』というライプニッツの公理にしたがって，継起的な社会状態の各々を，先行する段階の必然的帰結として，そして後続する状態の不可欠の推進者として把握する」(8)ことにおいて成り立つものであると。

注

(1) Auguste Comte : Plan des Travaux Scientifique Nécessaires pour Rorganiser la Société, (Œuvres d' Auguste Comte, édition anthropos. Paris, 1969 tomeX, Appendice Général.) P. 100。霧生和夫訳「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」(『世界の名著』，中央公論社，第36巻) 103頁。

(2) Karl Marx : Das Kapital, Dietz Verlag. Berlin. 1966. Bd. I. S. 28. 長谷部文雄訳「資本論」第一部上冊，87頁。青木書店。

(3) ヘーゲルによれば「発展は，すでに潜在していたものを顕在化させるにすぎない」(Hegel, Enzyklopädie. § 161. Zusatz) 過程である。

(4) ポパーは，「ヘーゲルを踏襲したマルクスのみならず，コントを踏襲した J. S. ミルによっても主張されている」社会科学上の一定の立場をもって，「歴史主義(Historizismus)」(Karl Popper, Prognose und Prophetie in den Sozizialwissenschaften, in E. Topitsch, edi. : Logik der Sozialwissenschaften, Kiepenheuer S. 115.) と命名し，これを「前科学的思考」とみる。

(5) 芥川集一；「実証主義の源流——コント社会学の方法批判」(『科学と思想』，新日本出版社，No. 2.) 96頁。

(6) J. S. Mill, Augute Comte and Positivism, in Collected Works, X, Univsersity of Toronto Press. P. 293.

(7) Auguste Come ; Cours de Philosophie Positive, quatrième volume (Œuvres, tome IV) P. 555.

霧生和夫訳「社会静学と社会動学」(『世界の名著』, 第36巻, 中央公論社) 313頁。
(8) Auguste Comte, ibid., P. 292.

第一節　社会諸形態の発生，発展，没落の論理と「終末論」的思考様式の問題

〔2〕 われわれはまず最初に，コントならびにマルクスにおいて，社会諸形態の発生，発展，没落が，どのような論理においてとらえられていたかを問題にしたいと思うが，この点については周知のように，すでにヘーゲルによる古典的な定式化が存在する。すなわちヘーゲルは，その『歴史哲学講義』の第二部をなす「ギリシヤの世界」の冒頭で，「いかなる世界史的民族の生活のなかでも，これと同一の過程がくりひろげられる」(1)として，次のように述べた。

「われわれはギリシヤの歴史を三期に区分する。」「ギリシヤ世界が東洋世界を前提するように，一つの民族が前提をもつ場合には，その民族の起源のなかには，他国の文化が流入してくるのであるから，その民族は，自分独自の文化と外国に由来する文化という二重の文化をもつことになる。(これら二つの文化は，たんに異質であるにとどまらず，互いに反撥しあいさえもするであろう――引用者) そこでこの二重の文化を統一することが，その民族の成長であり，課題である。第一期は，この二つのものを統合して，現実的なそれ固有の力を形成することをもって終る。ところで，この力は，自己の前提であったもの (すなわち今の場合でいえば，東洋世界――引用者) に対して行使される。そこで第二期は勝利と幸福との時期である。けれども民族がその力を外部に向けている間に，その内的諸規定は弛んできて，外国に対する緊張がなくなると同時に，その内部の不和分裂が正面にでてくる。それは芸術や学問においても，理想と現実との分離となってあらわれてくる。ここに没落のはじまりがある。第三期は，より高い精神を生む民族との接触による没落の時期である。」(1)

ハーゲルは以上をもって，世界史の「各々の段階が，それ自身の内部でたどる形成過程と推移の弁証法」(2)の概括としたが，われわれがそこからヘーゲル特有の民族史観を捨象して，一つの段階の発生，発展，没落の一般的論理をとり出すならば，それは次のようにまとめることができるものであろう。すなわち第一期 (＝発生期) は，矛盾の統一にいたる時期であり，第二期 (＝発展期) は，かかる統一がますます発達させられる時期であり，第三期 (＝没落期)は，統一の完成によって，もはや統一しえないような内的諸矛盾が全面的に顕現してくる時期であると。いいかえれば，一つの形態は，矛盾を統一するものとしてこそ必然的に発生し，発展するのであるが，かかる発展は同時に，もはや統一しえないような諸矛盾をつくり出していく過程に他ならないから没落すると。

われわれはコントとマルクスが，基本的にこの論理にしたがっていること，しかもそれをさらに一歩具体化していることを，次にみるであろう。まずコントからはじめる。

〔3〕 コントは社会発展を，基本的に「神学的軍事的」体制から，「形而上学的法律的」体制を経由して，「実証的産業的」体制に至る過程，としてとらえていた。ところでコントは，社会的意識の発達をもって，社会発展全体の主導的要因と考えていたので――この点についてのたちいった検討は，次節において行なう――社会発展の「中心的連鎖」(ミル) をなすものは，神学的――→形而上学的――→実証的という，人間精神の発達の「三状態の法則」に他ならなかった。そこでわれわれも，さしあたり，コントにおける人間精神の発達法則の論理構造に，関心を集中することにしたい。

コントによれば，理論と観察とは相互前提的なものである。すなわち理論をつくりあげる為には観察が必要であり，逆に「一貫した観察を効果的に遂行する為には」（「現実的であれ空想的であれ，また曖昧であれ正確であれ」）「まずなんらかの理論が必要である。」[3]ところで支配的な理論がいかなる形態をとるかは，その時々の観察の蓄積程度によって定まるであろう。何故なら観察は徐々に蓄積されていくものに他ならないが，それは必然的に実証的理論を成長させ，したがって観察が高度に蓄積された段階における支配的な理論は，実証的なそれ以外ではありえないからであり，他方，観察の蓄積がいまだわずかな段階においては，大部分の現象はそれ固有の実証的諸法則が知られていない為に，よく知られた少数の現象の実証的法則からの類推によって，すなわち神学的に説明されることにならざるをえないからである。ここで神学的説明とは，現象を意欲から説明することであるが，「まず個人的あるいは社会的行為に固有の初期の自然法則（すなわち諸意欲→諸行為→諸結果という実証的法則）が自然に生まれ，ついでこれが外界の全現象に迄無理に拡張されることによって」「神学的哲学の真の根本原理が生まれた」[4]のであった。かくして最初の支配的な理論は神学的理論であったのだが，それは以上であきらかなように，最低限の実証的理論を前提にしてはじめて成立するものに他ならなかったのである。他面それは，最初の支配的な理論としては，観察の蓄積を助けるものであり，したがってその前提たる実証的理論の成長を促すものであった。かくして神学的理論と実証的理論とは，当初においては前提を措定する調和的な円環構造をなすものに他ならなかったのである。

しかし以上で明らかなように，それは同一規模での円環運動をくり返すものではない。そこにおいて実証的理論は成長をとげ，又これに対応して神学的理論も，一定の変容を遂げていく。しかも実証的理論の一定程度以上の成長は，必ずや支配的な神学的理論との衝突に，その支配をゆるがすものに至らざるをえないであろう。「二つの理論間の方法上の根本的対立はますます大きくなり，いかなる問題についても敵対することが避けられなくなる。」[5]かくして神学的理論はもはや支配的な地位にとどまることができなくなる。しかし実証的理論も又，いまだそれ自身が支配的にりうる迄に，十分に成長しきっているわけではない。しかしこのような敵対状態が，いつ迄もそのまま続くならば，「つねに方法の統一と理論の同質性を求める」[6]人間の欲求は充足されないままとなり，ひいては知性そのものがいわば麻痺状態におちいることになるであろう。

このような困難を突破しうるものは，神学的であると同時に実証的な理論が登場して，支配的な地位につくこと以外にはありえない。ところで「神学的理論の前提と実証的理論の結論とを，一時的に妥協させる媒介物」[7]（ミル）こそが，形而上学的理論である。それは事実をもはや意欲によっては説明しないという点では，実証的精神の要請に答えるものであるが，他面現象を依然として超感覚的なもの（「本性」や「本質」）によって説明するという点では，神学的精神の要請に合致する。しかもそれは，いわば突然に出現するものではない。コントによれば，神学的理論は観察の蓄積とともに，呪物崇拝──多神教──一神教という変容を遂げていくのであるが，それとともに神（々）は，個々の現象を直接に支配するのではなく，現象のうちに宿る自己の分身（「本性」「本質」等）を通じてそれを支配する，と考えられるようになる。したがってそれは次第次第に形而上学的理論を含蓄するものとなっていく。それ故形而上学的段階の登場は，先行段階のうちに潜在していたものの顕現としてとらえられねばならないのである。

さてこのようにして成立した形而上学的理論は，実証的理論と衝突する度合がより小さいから，その成長を促し，したがってその自立の可能性をますます高めていくであろう。しかも形而上学的理論の完成化過程それ自体は，同時にそれが誰の目にもますます陳腐なものとみえてくるような逆説的な発展過程に他ならない。すなわち「諸概念がますます煩瑣になっていって，そのいわゆる実体概念も，しだいに結局は対応する実在のたんなる抽象名称以外のものではなくなり，ついには，このような説明が全く無意味であることが，全く滑稽なほど自然にはっきりわかってしまう」[8]のである。このような時点にたちいたるならば，今や支配的たりうる迄に成長した実証的理論は，「自己を成長させたその用具を破壊するという，すこぶる容易な仕事にとりかかる」[9]（ミル）ことになるのである。すなわち形而上学的理論は没落し，第三段階が到来することになると。

以上がコントにおける人間精神発達の「三状態の法則」の概略である。そこでわれわれが，形而上学的理論に照準をあてて，その発生，発展，没落の論理をみてみるならば，それが神学的理論と実証的理論との矛盾の産物であり，両者を調和させ統一するものとして，その発生がとらえられていること，又それは最初から実証的理論との矛盾を潜在させており，その発達が同時に実証的理論の発達でもあり，しかも後者を自立させうる迄に発達させるものである為に，矛盾を顕現させて没落するととらえられていることがわかるであろう。すなわちそれは先のヘーゲルの論理と全く同一である。

さらにわれわれは，次の三点にも留意しておくべきである。まず第一に，ヘーゲルは「有限なものは潜在的に自己自身の他者」[10]であって，自己の成長が同時にかかる他者の成長でもあるが故に没落する，という事態をもって「有限なものの弁証法」と呼んだが，コントにおいても，神学的理論ならびに形而上学的理論は，その否定としての実証的理論を前提にしてはじめて成りたつものであり，かつかかる否定的なものを成長させざるをえないものとして，とらえられていることである。しかし第二に，かかる否定的なものは一挙に自立しうるわけではない，とされている点にも注意すべきである。すなわち純粋に内的な発展においては，「他者」（否定的なもの）の成長はあく迄も連続的である為に，それがたとえ現在の形態と衝突するに至ったとしても，それ自身いまだ自立しうる迄になっているわけではなく，したがってそれは，両者を調和させ，統一するような形態が形成されることによってのみ，それ以上の成長をとげ，最終的に自立をなしとげることができるのだ，とされているのである。最後に第三に，神学的理論と実証的理論（さらには形而上学的理論と実証的理論）とは，当初においては，調和的な円環構造をなしていたもの，としてとらえられている。では何故敵対関係が発生し，発達してくるのか。それはそれが同一の大きさの円運動をくり返すのではなく，いわば拡大再生産を行い，とくに従来の形態の支配を揺るがす迄に実証的理論を成長させることになるからだ，とされているのである。すなわち，矛盾の成長は拡大再生産の直接の帰結である。さてわれわれはコント以上の論理を念頭におきつつ，次にマルクスについてみることにしよう。

〔なお軍事的→法律的→産業的という，もう一つの「三状態の法則」（物質的発達の「三状態の法則」）についてもみてもおく必要があるのであるが，その論理構造は，われわれが上に述べたものと全く同一であるから，以下，後の議論にとって必要な限りにとどめておきたいと思う。コントによれば「世俗社会」（あるいは「市民社会」）が成立する為には，秩序が，そして「規則正しさと規律という習慣」[11]が必要である。しかし「未開時代の人間は，

あらゆる規則的な労働に対して，根強い嫌悪をいだいていた」[12]ので，かれらは暴力によって強制されることによってのみ，「労働に対する忍耐力」[13]と「産業的規律」[14]とを習得し，形成することができたのである。したがって最初の世俗的社会は，最低限の産業を前提としつつも，軍事的なそそれである他はなかった。産業と産業的組織は，かかる社会の下ではじめて発達することができたのである。しかしその発達は当然，既存の軍事的社会との衝突に至るであろう。しかし産業的維識は，いまだ自立しうる迄に十分に発達しているわけではない。そこで，軍事的社会が攻撃的なものから防衛的なものに転化するとともに，そのうちに含蓄されるに至った法律的形態が，正面に登場することになる。それは，一面では従来と同じように生産者の隷属体制である。しかし他面では，直接の暴力による「個人的奴隷制」は姿を消し，支配はすべて「法律」を通じて行われるが故に，産業的組織に対して，より調和的なのである。しかしその発達は，自由説や人民主権論を生み出し，その結果として，無政府状態をひきおこすが故に，社会を組織する上で無能であることを暴露するに至る。かくしてその下でいまや自立しうる迄に至った産業的組織は，それにとってかわり，生産者の支配体制が樹立されることになる。したがってコントによれば，人類の物質的発達史は，産業の発達に対応する産業家（生産者）階級の勃興史であり，その解放に至る過程なのである。〕

〔4〕 マルクスは周知のように，コントとは逆に，「精神的生産は物質的生産とともに変化する」[15]という立場をとっており，かれがその努力を集中したのは，物質的生産の一つの形態，すなわち資本主義的生産の発生，発展，没落の法則の解明であった。ところでマルクスの『資本論』のうちで資本主義的生産様式それ自体の運動法則が解明されているのは，同書第一巻の第二篇をその導入部とする，第三篇から第七篇にいたる部分，すなわちいわゆる「剰余価値論」と「資本蓄積論」の部分だとみることができる。そこでわれわれも，もっぱらそこに注意を集中することにしたい。

マルクスによれば，資本主義的生産とは，資本家が市場において「労働力」商品をみい出し，それを購入し，それ自身の等価を生産する「必要労働」以上に，「労働日」を延長することによって，「剰余価値」を生産することである。しかし資本主義的生産は，再生産過程としては，自己の前提である「資本関係そのものを，一方には資本家を，他方には賃労働者を生産し，再生産するのである。」[16]

さて「剰余価値」生産の最初の歴史的形態は，「絶対的剰余価値の生産」である。マルクスによれば，それは「労働日」を延長することによって「剰余価値」を生産することである。しかしそそれは当然賃労働者階級の反抗をよびおこさずにはおかない。すなわち，「絶対的剰余価値の生産」は，自己の不可欠の前提（賃労働）が自己に対して否定的であるという，一つの矛盾を背負うものに他ならないのである。さらに「絶対的剰余価値の生産」は，なんら労働生産力を上昇させるものではないから，資本の「技術的構成」を反映する限りでの「価値構成」，すなわち「有機的構成」は同一なままにとどまる[17]。したがって資本蓄積は，それに比例的に労働力需要を増大させ，それはやがては「普通の労働供給」を上回ることになる。そうなれば賃金（「必要労働」部分）は高騰し，かつその高騰が「資本を養い育てる剰余労働が，もはや標準的分量で提供されなくなる点にふれると」「蓄積がおとろえ，賃金の高騰が再び反撃をこうむる」[18]ことになる。その結果として，蓄積が再び旺盛に展開されることになるとしても，「絶対的剰余価値の生産」に対応する，資本の「有機的構成」が同一なままでの資本蓄積は，自己の前提である「労働力」商品の供給が自然的限界をもつ

為に，たえずくり返し困難におちいることにになる。かくしてそれは自己の前提が自己に対して否定的であるという，もう一つの矛盾を背負うものである。

ではこのような矛盾はどのようにして解決されることになるのであろうか。賃労働者階級が「剰余価値」生産を廃棄することによってであろうか。否である。何故なら労働者階級は，量的にも質的にも，いまだ自立をなしとげうる迄に成長してはいないからである。そこでこれらの矛盾は，これ迄潜在的であった「剰余価値」生産の新たな形態が登場することによって解決される他はない。マルクスによれば「絶対的剰余価値」生産そのものは，むろん労働生産力の上昇をはかるものではない決してないのであるが，しかしそれ自身「必要労働時間を労働日のうちの一部分に制限することを可能ならしめるような，労働生産力の発達を，その条件とする」(19)ものである。すなわち，具体的にいえば，単純協業をすでにその条件とするものである。ところでそのそれ以上の発達による労働生産力の上昇は，「必要労働」を短縮せしめ，もって「労働日」を延長することなしに「剰余価値」を生産することを可能ならしめる。これがマルクスのいう「相対的剰余価値」の生産である。それは「剰余価値」の増大を求める資本家と，「労働日」の延長に抵抗する労働者の，双方の要求を充足する。ところで，「相対的剰余価値」の生産機構は，機械制大工業においてその頂点に達するが，それは労働者を機械のたんなる付属物に転化させることによって労働疎外を強化するが故に，又「資本の専制支配」をたえがたい迄に高めるが故に，労働者階級の新たな抵抗をひきおこさずにはおかない。（なお機械の導入に伴う，労働者階級の抵抗力の一時的弱体化を利用して，「労働日」の延長や「労働強化」という，かつての搾取方法が復活される。）しかしこのような敵対関係において，従来のそれとは異る点が一つ存在している。それは，労働者階級が今や自立しうる能力を身につけている，ということである。すなわち機械制大工業は，労働者階級をたんに量的に膨大に増大させるのみならず，「種々の社会的機能が，そのあい交替する活動様式であるような，全体的に発達した個人」(20)を，その「死活問題」たらしめ，したがって労働者階級それ自身による生産過程の指導の現実的可能性を，はじめてつくり出すものとなるのである。他方「相対的剰余価値」の生産に対応する資本蓄積においては，「有機的構成」は累進的に高度化し，その結果として「相対的過剰人口」が生み出されることになる。だがそれこそは，「自然的制限にかかわりのない産業予備軍」(21)として，資本蓄積を先の困難から解放するものに他ならない。しかしそれは労働者階級にとっては，貧困，労働苦，隷属の完成を意味するものに他ならないから，同時に労資の敵対関係の完成としての意味をもつであろう。

かくして「相対的剰余価値」の生産とこれに対応する資本蓄積は，先行する段階の諸矛盾を解決するものであったのだが，しかしその発達は再び労資の敵対を増大させ，（資本の集中集積とあいまって）労働者階級の自立（＝解放）の条件をつくりあげるものであったが故に没落する(22)，とされたのであった。

以上がマルクスにおける資本主義的生産様式（それ自体）の内部的諸段階の論理の概要なのであるが，ここに，一つの形態（「相対的剰余価値」の生産）は先行する形態の矛盾を調和させ，統一するものとして発生し，発展するのであるが，その完成は，その内的矛盾の全面的顕現となるが故に（そして自己の前提たる賃労働者階級の自立の条件をつくりあげるものであるが故に）没落するという論理，および一つの形態（「絶対的剰余価値」の生産）は，自己の否定（賃労働）を前提にしてはじめて成りたつものであるが，しかし否定的なものは

一挙に自立しうるのでなくて，そこにおいてそれが自立しうる迄に成長させられる所の中間段階（「相対的剰余価値」の生産）を経由してのみ自立することになるという論理，そして最後に，資本と賃労働とは，相互に前提しあう所の調和的な円環をなすものに他ならないのであるが，そこに矛盾が発生し成長してくるのは，資本がより大なる剰余価値を，したがって拡大再生産をめざすからこそであるという論理，が貫徹していることがわかるのである。したがってそれは，われわれが先にコントにおいて確認したものと同一である。

ところで許萬元氏は，「第三者の媒介による調和」[23]によって解決される矛盾を「調和矛盾」と呼び，又「一方が勝者となり，他方が敗者となる」[23]ことによって解決される矛盾を「闘争矛盾」と呼んで，次のように述べている。「歴史においては『調和矛盾』が支配し，体系においては『調和矛盾』が支配する」[24]と。しかし以上で明らかなように，歴史においてもただちに「一方が勝者となる」ことによって，矛盾が解決されるのではない。それは矛盾が調和させられる中間段階を経由しなければならないのである[25]。

〔5〕 コントは「実証的精神」をもって「いたるところで絶対的なものを相対的なものにおきかえる」[26]と述べ，マルクスは「合理的な姿における」「弁証法」は，「どのような生成せる形態をも，その運動の流れにおいて，したがって又その経過的な側面から理解」[27]する，と述べた。かれらはこのような一般的立場にふさわしく，いかなる社会形態をも「かぎりない発展の途上におけるたんなる過渡的段階」[28]（エンゲルス）にすぎないものと理解した。そしてこのような過渡的なものの論理こそが，先に述べたものに他ならないのであった。

ところでわれわれがコントとマルクスをくらべた場合，コントの「三状態の法則」が，人類史の全体を包括するものであったのに対して，マルクスの三段階が，資本主義的生産という人類史の最近の一段階の，内部的小三段階であるという相異をみい出す。しかしこの相異は，かれらが，かれらの時代の基本的対立をどこにみていたか，の相異に由来するものに他ならない。すなわち，コントにとってその時代は「神学的軍事的」要素，「形而上学的法律的」要素，「実証的産業的要素」という三者の，三つ巴えの闘争の時代であった。そしてコントが「一つの点でしかない現在の性格を把握する為に，現在に有効にたちかえりうるのは，過去を通じて未来を構想した場合だけである」[29]という原則にのっとって，それらの生成史を追求した時，それは結局人間社会の起源に迄さかのぼることにならざるをえなかったのである。これに対してマルクスは，かれの時代の基本的対立を，コントのいう「実証的産業的」要素（いいかえれば産業資本主義体制）それ自体のはらむ内部的対立，すなわち資本と賃労働との間にみい出していた。したがってその生成史の理論化としての三段階の論理は，資本主義的生産の内部的小三段階以外のものではありえなかったのである[30]。

さて，コントが過去をみることによってえた結論は，「実証的産業的」要素こそが真に未来的なものである，ということであった。しかしそれはコントにとって「人類にとっての究極的状態，人間性に最もよくあった状態」[31]であった。人類史は「実証的産業的」状態という，究極段階に至る諸段階なのである。これに対してマルクスはむろんそれをも過渡的なものととらえたのではあったが，注意すべきは，マルクスにおいても，それにとってかわる「共産主義社会」は，実質的には，人類史の究極段階とみられていたことである。すなわちマルクスは，来たるべき「共産主義社会」を過渡的たらしめるような，それ固有の矛盾をつかむことができなかった。いいかえれば，それを，それにとってかわるべき他の形態を含み成長させる二元的なものとして，とらえることができなかった。したがってそれはマルクス

にとって，一つの調和的な世界としてあらわれざるをえなかった。マルクスは，それが有限なものであることを，漠然と予感していたにすぎない。すなわちコントにおいてもマルクスにおいても，人類は，その進歩がもはや既存の形態と衝突することがなく，進歩がいわばなめらかに行われうるような時代に突入する，と考えられていた。進歩がやむからではなくて，それらの形態は，もはや進歩と衝突することがないが故に，究極的なものとみられたのである(32)。

ここにみられる，いわゆる「終末論」的思考様式は，むろんかれらの一般的立場（すべての規定された形態の相対性，有限性）と矛盾するものである。しかしこのような矛盾は，何人も回避しえない宿命的矛盾，とみられるべきものである。人間は「時代の子」であって，われわれに知られうる未来というのは，つねに現在のうちに含まれるそれだけである。そしてわれわれは，「タマネギの皮をはぐ」ような「分析的方法」によって，現在が含む未来をとり出す。より深い分析は，より遠い未来をとり出すであろう。しかしこのような分析の果てに，その矛盾がいまだ眠り込んでおり，今日のわれわれにとっては，到底二元的なものとは思われないような形態があらわれてくることは，不可避的である。すなわち今日のわれわれにとっての「終末」があらわれてこざるをえないのである。

マルクスはこの事情を，十分に理解していたように思われる。何故ならかれは，すべての形態は過渡的であるというその一般的立場にもかかわらず，なんらかの究極形態を想定する立場を，ただちに非科学的として断罪したわけではなかったからである。かれはつぎのように述べた。「経済学がブルジョア的である限り，すなわち資本主義的秩序をもって社会的生産の歴史的過渡的段階とは理解しないで，逆にその究極的で絶対的な姿態と理解する限り，それは，階級闘争がなお潜在的であるか，又はたんに孤立的現象として発現している間だけ，科学的たりうるにすぎない。」(33)逆にいえば，矛盾が本格的に展開する以前においては，資本主義的生産をもって究極的な生産形態とする立場も，なお科学的たりうる，というのである。

したがって，社会発展論は，論理構造上，つねに一つの究極形態に至る発展諸段階（その成長と自立の過程の理論）という形で構成されざるをえない。「一般に史的発展といわれるものの基礎にあることは，最終的形態が過去の諸形態を，自分自身に至る諸段階とみなす，ということである。」(34)（マルクス）そしてこの「最終的形態」は，まさに自己をそのようなものとして意識しているからこそ，「過去の諸形態をつねに一面的に把握する。」(34)しかし人間は，畢意このような一面性を脱却することができないのであって，進歩はただ，先人にとって究極的であったものが，後の人によって過渡的なものととらえられ，その一面性が，全面性により接近した一面性になること，この点に存するにすぎないであろう。

注

(1) G.W.F. Hegel: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte (Werke, Suhrkampf Verlag. Bd. 12.) S. 276. 武市健人訳『歴史哲学』，下巻，4～5頁。

(2) Hegel, a. a. O., S. 77. 同上訳書，上巻，93頁。

(3) Comte, OEuvres, tome IV, p. 533. 前掲訳書，300頁。

(4) Comte, ibid., tome IV, p. 555. 前掲訳書，312頁。

(5) Comte, ibid., tome IV, p. 557. 前掲訳書，314頁。

(6) Come, ibid., tome IV, p. 532. 前掲訳書，299頁。

(7) Mill, Collected Works, X. p. 279.

(8) Come, ibid., tome IV, p563. 前掲訳書，318頁。

(9) Mill, ibid., X, p.279.

(10) Hegel: Enzyklopädie, § 181, Zusatz.

(11) Come, ibid., tome IV. p. 571. 前掲訳書，332～3頁。

(12) Comte, ibid., tome IV. pp. 572～3. 前掲訳書，323頁。

(13) Comte, ibid., tome IV. p. 574. 前掲訳書，325頁。

(14) Comte, ibid., tome IV. p. 573. 前掲訳書，324頁。

(15) Marx, Engels, Manifest der Kommunistischen Partei, (Werke, 4.) S. 480. 邦訳，「マルクス・エンゲルス全集」，第四巻，大月書店，493頁。

(16) Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 604. 前掲訳書，第一部，下冊，902頁。

(17) ただし正確にいえば，「価値構成」それ自体は高まる。

(18) Marx, a. a. O., Bd. I. S. 649. 前掲訳書，第一部，下冊，964頁。

(19) Marx, a. a. O., Bd. I. S. 534. 前掲訳書，第一部，807頁。

(20) Marx, a. a. O., Bd. I. S. 511. 前掲訳書，第一部，下冊，775頁。

(21) Marx, a. a. O., Bd. I. S. 644. 前掲訳書，第一部，下冊，984頁。

(22) なお自立の運動論的条件が形成されることについては，「資本主義的生産過程そのものの機構によって」「(労働者階級が) 訓練され，結合され，組織される」(Marx, a. a. O., Bd. I. S. 791) ことが指摘されている。

(23) 許萬元，『ヘーゲル弁証法の本質』，青木書店，103頁。

(24) 許萬元，前掲書，127頁。

(25) 第一期から第二期への移行を規定する矛盾は，調和によって解決されるし，又されねばならない矛盾であるが，第三期を規定する矛盾は，一方が他方を破棄することによって解決されるし，又されねばならない矛盾である。矛盾の性格におけるこのような差異は，その時点において否定的なものが自立しうる迄に成長しているか否か，に由来するのである。

(26) Auguste Comte, Discours sur lésprit positif (Œuvres, tome XI). p. 43. 前掲訳書，180頁。

(27) Marx, a. a. O., Bd. I. S. 28. 前掲訳書，第一巻，上冊，87頁。

(28) Friedlich Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie (Werke, 21.) S. 267. 邦訳『全集』，第21巻，271頁。

(29) Comte, Plan, (Œuvres, tome X,). p. 100. 前掲訳書，103頁。

(30) したがって筆者は「『体制間的段階論』と『体制内的段階論』は段階論の思考様式として相互にはっきりと区別しうる」(大塚久雄，「社会変革とは何か」〔『岩波講座　哲学』，第五巻〕272頁。)とは考えない。コントは「体制間的段階論」を，マルクスは「体制内的段階論」を語っているのであるが，その論理構造（思考様式）は，全く同一なのである。

(31) Comte, ibid, tome X. p. 47. 前掲訳書，51頁。

(32) 西田照見氏は，「その時々の充足手段はつねに人々のあらたな欲求に応じきれないわけである」から，高度の「共産主義社会」における「『欲求に応じた分配』というようなことは，完成的に実現はなされないところの，理念的に要請される一つの『終局的』目標でしかありえない」(「マルクス主義における終末論的発想」，『思想』No. 593. 6頁) と述べて，かかる理念的なものが実現するかの如く語る，マルクスの「非科学性」を批判している，氏が前半で述べていることは，人類史をつらぬく抽

象的一般的矛盾であり，したがって当然，将来の「共産主義社会」においても依然として存在しつづける矛盾である。われわれはこのことから，進歩（少くとも進歩への衝動）はやむことがない，と結論しうる。しかしそのことは，「欲求に応じての分配」なるものが実現不可能なものだ，ということを意味するものではない。何故なら「欲求に応じた分配」と「欲求を完全にみたす分配」とは，相互に区別さるべき二つのものだからである。すべての人々が労働者であるような状態においては，二つの分配方式しかありえない。すなわち個人主義的な「労働に応じての分配」か，共産主義的な「欲求に応じての分配」か，のいずれかである。マルクスのいわんとしていることは，「労働それ自体が，生活の第一の欲求」(Werke, Bd. 19 S. 21.）となっていない段階においては，富は労働によってのみ生産されるのであるから，前者の方式が不可避であり，そして「労働それ自体が，生活の第一の欲求」になってしまえば，人類は後者の方式をとりうる，ということであるにすぎない。ただしエンゲルスの次の言葉，すなわち「(社会主義における）分配の方式は，根本的には分配すべきものがどれだけあるかにかかっている。」(Werke. Bd. 37. S. 436.）という言葉は，はなはだ誤解を招きやすい，否はっきりいえば誤りである。将来社会における分配の方式は，「分配すべきものがどれだけあるか」に依存するのではなく，究極的には，労働の性格がどうなっているかに依存するのである。

(33) Marx : Das Kapital, Bd. I. SS. 19～20. 前掲訳書，77頁。

(34) Marx : Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomíe, Dietz Verlag, 1953. S. 26. 高木幸二郎監訳，『経済学批判要綱』，大月書店，第一分冊，28頁。

第二節　社会の「全体」認識と「宿命論」的思考様式の問題

〔6〕 コントもマルクスも，広義の社会をもって，ほぼ共通に，「市民社会」（「社会的存在」），「社会的紐帯として役立つべき一般思想」(1)（「社会的意識」），および「政治的国家」の三者から成る全体として把握してていた。しかしかれらは同時に，それらが相互に完全に独立的ではなく，一つの「不可避的連帯」のうちにあると考えていた。コントがこのような事態を，身体にたとえて「交感（consensus)」(2)と呼んだこと，およびマルクス亡きあとの老エンゲルスが，史的唯物論をもって経済一元論（経済現象が唯一の原因であるとする立場）であるとする誤解をとく為に，「全体の大きな経過は交互作用の形態で進行する」(3)むねを，くり返し強調したこと，これらはいずれも良く知られている事柄である。だがそうであるとすれば，かれらにおいて社会発展が，いわば有機的全体の編成がえして，一つの「体制」から次の「体制」への移行としてとらえられていたのは，きわめて当然のことであったといわねばならないであろう。かれらはともに社会の「全体」を，「体制」を問題にした。

だがかれらのこのような立場に対して，今日，カール・ポパーによって「全体論」（wholism)」なる批判が加えられている。ポパーによれば，人間の認識は必然的に選択的なものなのであって，「事物のあらゆる性質もしくは様態の総体，そして事物を構成する諸部分の間になりたつあらゆる関係の総体」としての「全体」を認識することは不可能である(4)。ポパーのこの主張は正しいが，コントやマルクスにおける「全体」が，ここにいわれている意味での「全体」すなわち具象的なまるごと的全体に等しいものであったかどうかが問題である。

コントは社会の「全体」認識を問題にした箇所で，次のように述べている。「一般的事実は，それについで一定の具体的細部の研究をするのに不可欠の照明を与えてくれるが，細部の精密な知識は，その性質上，人間には決してえられない」(5)と。コントは，社会学にお

いては認識は「全体」から「部分」へと進むべきであると考えたが，それは抽象的一般的なものから具体的特殊的なものへと進む，という以上の意味をもってはいなかった。すなわちコントにおける「全体」とは，諸々の抽象的一般的なもの相互の抽象的一般的関連を，いわゆる「構造」を意味するものだったのである。所与の社会の「構造」認識としての「全体」認識は，その内容を豊富化することにより，しだいに具象的なまるごと的全体に接近するが，しかしそこに到達することは決してできない。コントはこのことを十分に自覚していた。そしてそれはマルクスに関しても，同様であったと思われるのである(6)。

〔7〕 ところでかれらは，このような有機的全体の発展において，一つの要素（あるいはモメント）の発展こそが，その「中心の連鎖」（ミル）をなす，と考えていた。それは具体的には，コントにおいては「社会的意識」であり，マルクスにおいては「社会的存在」（「物質的生活諸関係の総体」としての「市民社会」の別名）であった。だがかれらのこのような見地は，今日，「すべてが他のすべてに依存」することを無視した，前科学的な「優越要因説」(7)であるとして，批判の的になっている点の一つでもある。しかしこのような批判が誤解にもとづくものにすぎないことは，コントが「優越要素（élélment prépondérant)」といえども「後には他の要素の発達の影響をうけて，新しい発展の方向をたどる」(8)と述べていること，および，交互作用にかんする老エンゲルスの先の言葉によってすでに明らかである。しかし問題はむしろ「すべてが他のすべてに依存する」というのに，どうして「優越要因」（マルクス流に言えば「包括的モメント」）なるものが存在しうるのか，その論理的性格は何か，という点にあるであろう。このことは，かれらが何故「社会的意識」あるいは「社会的存在」をもって，それとみなしたのか，を探ることによって明らかになるであろう。

われわれはまず，コントとマルクスが「政治的国家」に対して，「社会的意識」もしくは「社会的存在」を「優越要素」としたのは何故か，をみてみよう。まず第一に，コントにおいてもマルクスにおいても，「政治的国家」は「市民社会」における敵対の産物に他ならず，しかもこのような敵対の消滅する「実証的産業的」体制あるいは「（高度の）共産主義社会」においては死滅するものに他ならなかった。（コントは，そこにおいて「人の支配にかわって物の支配がはじまる」(9)と述べた。）第二に，コントにおいてもマルクスにおいても，「市民社会」は一つの合法則的な運動を行うものに他ならなかった。すなわちコントにおいては，産業の発達とともに，「市民社会」は軍事的→法律的→産業的という「一つの不可避的コース」(10)をたどって発展する。又マルクスによれば（「市民社会」における「包括的モメント」をなす）「生産諸関係」は，生産諸力の発達に条件づけられて，「人々の意志から独立した」(11)運動を展開するのであった。「政治的国家」はむろん一定の意志をもって「市民社会」に規制を加えるものに他ならないが，しかしその対象が以上のように，「一つの不可避的コース」をたどって発展するのであれば，その規制は二次的ものにとどまり，むしろ究極的には，「市民社会」こそが「政治的国家」を規制する，とみなされねばならないであろう。かくして両者は，「政治的秩序は市民的秩序の表現にすぎない」(12)（コント），あるいは「一定の市民社会を前提すれば，そこにはそれに対応する一定の政治的状態が存在する」(13)（マルクス）という，まさに同一の認識に到達したのである。（なお次にみるように，コントにおいては，「市民社会」発展の合法則性は，人間精神発達の合法則性の系であった。）かくしてわれわれは，コントおよびマルクスにおいて，「社会的意識」もしくは（および）「社会

的存在」が，「政治的国家」に対して「優越要因」とされた理由は，まさにそれらが不可避的不可抗力的に発達する要因（エンゲルスの表現によれば，「究極において自己を貫徹する」[14]要素）とみなされていたからである，と結論することができるであろう。

次にわれわれは，コントとマルクスが「社会的意識」と「社会的存在」との関係において，その一方をそれぞれ「優越要因」としたのは何故かをみてみよう。コントは「市民社会」をもって，あく迄も，目的意識的形成体ととらえていた。「活動目的をはっきりさせることは，それが組織全体を構想する方向を定めることになるから，本当の社会秩序の第一の，そして最も重要な条件である。」[15]そしてコントによれば，「社会には二つの活動目的しかありえない。一つは」「征服であり，もう一つは」「生産である。」[15]その各々の目的にしたがって形成されるのが，軍事的社会および産業的社会である。むろん産業社会が成立する為には，産業それ自体が高度に発達していることが必要である。しかし産業社会を実現するには，それに先立って，そのような目的が明確にいだかれていることが必要である。かくしてコントによれば，「市民社会」の発展は「社会的意識」の発展によって嚮導されるものなのであった[16]。これに対してマルクスは，ヘーゲルの「理性の狡智」という観念論的表現に含まれている唯物論的内容，すなわち世界史の進歩は自然発生的になされてきたという事実認識[17]を継承した。「人間は自分で自分の歴史をつくるが，今日に至る迄，全体的計画にしたがって，全体的意志をもって，それをつくってきたのではない。」[18]（エンゲルス）人々はその物質的活動によって，無意識的により高度の「市民社会」をつくりあげてきたのであり，それに無意識的に適応することにより，一定の感情，習俗，考え方等をつくり出してきた[19]。人間達は，その後で，それを意識してきたのである。むろんいったんそれについての意識が成立するならば，そしてそれが科学的意識であるならば，われわれは「社会的存在」を何程か意識的に形成することができるようになる。しかしその場合でも，われわれは「社会的存在」を全面的に意識的産物たらしめることはできない。そこにはつねに自然発生的変化が実在するであろう[20]。この意味で，マルクスにあっては，「社会的存在」が「社会的意識」を（第一次的には）嚮導するものなのであった。かくしてわれわれは，「社会的意識」と「社会的存在」との関係においては，コントとマルクスがともに嚮導的主導的要因（ミルの表現によれば「第一動因（prime agent）」）を「優越要因」とした上で，その内容をめぐって対立している，と考えることができるであろう。

それ故以上を総括すれば，マルクスならびにコントは，「政治的国家」，「社会的意識」，「社会的存在」の三者のうちから，不可抗力的かつ主導的な要因をもって，「優越要素」としたといいうるであろう[21]。さてこのような要因の存在を，ア・プリオリに前提することは，むろん許されない。しかしそのような「事実が，もしもたまたま存在するならば（if it should happen to be the fact），それは研究の進展を大いに助けるものである。」[22]（ミル）何故なら第一に，われわれがたんなる相互前提的全体を対象とする場合には，その説明に際して必らず「論点窃取」を犯さざるをえないのであるが，主導的要因の存在は，われわれに説明の合理的出発点を与えてくれるからである[23]。第二に，不可抗力的要因の存在は，われわれが他の要因をもってその発達をたんに速めたり遅らせたりするにすぎない要因として位置づけることを可能ならしめ，したがって，複雑な相互作用的全体から，さしあたりそれらを捨象して考察することを可能ならしめるからである。

ところで主導的要因なるものについては，その経験的な実在可能性を認めても，不可抗力

的不可避的要因なるものについては，まさにその実在性をア・プリオリに否定しうる（あるいは否定すべきである）と考える人々がいるであろう。これは周知の如く「宿命論」の問題と呼ばれているものであって，われわれはつぎにこの点について検討しなければならない。

〔8〕 さてわれわれは，「宿命論」に対する通常の陳腐な批判に対しては，深くかかわりあいをもつ必要を認めない。すなわちそれによれば，将来の一定の社会形態の到来が不可避なのであれば，われわれはそれに向って努力する必要などないではないか，というのである。しかしたとえば死はわれわれにとって不可避である（と認識されている）が，しかしそれを望ましくないと考える多くの人間達は，その到来時期を遅らせるべく，必死の努力を重ねているであろう。それに対して，このような反論で十分であろう。

ところでカール・ポパーは，以上のことを認めた上で[24]，コントやマルクスに対して，別種の角度から，「宿命論」という批判を加えている。ポパーによれば，「人間社会の進化は一つのユニークな過程」なのであるから，それにかんしては，本来の意味での法則（一般法則）は，そもそも成り立ちえない。しかしむろんわれわれは，そこに何等かの趨勢（たとえば，実証的理論の成長や労働生産力の上昇）をみい出すことはできる。そこでポパーは次のように言う。もしわれわれが（「すべての惑星がしだいに太陽に近づく」という事実を，「ニュートン物理学の内部で」「惑星間の空間がなんらかの抵抗物質によってみたされている，という仮定」をもうけることによって説明しうるように）その史的趨勢を，一般法則に初期条件を投入することによって説明しうるならば，そこには本来の意味での法則に準ずるそれ，「動力学的疑似法則」が存在するといってもよいであろう。しかし，ポパーは言う，コントやマルクスは，かれらのみい出した趨勢を，一般法則に初期条件を投入することによって説明するのを怠っており，それをあたかも無条件的な趨勢であるかのごとくにとりあつかっている。無条件的趨勢は，まさに無条件的であるが故に，絶対的であり宿命的である。しかしこのような無条件的なものは実在しえないはずである。この点をみ逃した所にかれらの「中心的誤謬」が存在すると[25]

しかしポパーの以上の議論は，コントならびにマルクスの社会発展論の論理構造に対する誤解の上にに築かれているものにすぎない。何故なら，コントもマルクスも，「優越要因」の発展の不可避性・不可抗力性を，まさに一般法則に初期条件を投入することによって説明しているからである。このことをまずコントについてみてみよう。

コントにおける一般法則とは，時所を通じてかわらない人間性の諸法則のことであったし，(持続しつづける)初期条件とは，欲求の完全な充足を許さない外的自然環境のことであった。そこでかれは次のようにいう。「人間性の実証的理論を，原初的環境の全体に適用することによって，われわれは社会系列の最初の項を確定しなければならない」[26]と。ここで「原初的環境」は，論理的には，文字通りの「初期条件」に相当するものである。ところでコントにおける人間性の諸法則のうちで，主なものは次のことである。すなわちまず第一に，知的活動を司どる器官は，大脳前額部に局在し，（ガル＝シュプルツハイムの理論）かつ器官は使用によって強くなり，しかもこのような変化は遺伝する（ラマルクの理論）。したがって知的活動は，つねにより大なる知的活動の能力をつくりあげるであろう。第二に，人間に「向上本能」といったものは存在しない。むしろ「孤立した人間，そして知性の全く目覚めていない人間は，他のどの動物とも同じように，本性上，きわめて保守的」[27]な存在である。「普通，人間の状態の漸進的改善という欲求や考えをいだかせるものは，社会的比較や

知性による不安な予測から生じる，際限のない欲望」[27]に他ならないのである。したがって，（人間は知性を働らかせることによって，社会生活の利益を自覚し，より強固な社会生活を営むようになるのだから），「向上の精神」は，究極的には，知的活動の産物なのだ，と言わねばならないであろう。ところで他方，「向上の精神」こそは，知性の行使を迫るものにほかならない。かくして一定の知的活動は，より大なる知的活動の能力をつくりあげ，かつその行使を迫る「向上の精神」を生み出すことになる。したがって，「原初的環境」の下で，「有機的生命の基本的欲求と，動物的生命の最も普遍的な本能から出た，粗野ではあるが力強い刺激」[38]によって，いったん知性が目覚めさせられるならば，その後は，無限の追加的変化がひきおこされ，全体として知的進歩が実現されることになるであろう。コントによれば人間史は「人間固有の能力を，しだいに顕著ならしめる」[30]過程に他ならないのであった。

われわれはこれと同一の論理を，マルクスにおいてもみい出すであろう。ただしマルクスの場合には，ブルジョア的時代とそれ以前の時代とを区別して論じることが必要である。すなわちブルジョア的時代においては，「競争の強制法則」によって，労働生産力のたえざる改善が，個々の資本家に対して義務づけられている。それ故に，この時代における労働生産力進歩の必然性については，これ以上の，又これ以外の説明をなすべきではない。しかしそれに先行する諸時代においては，逆に，単純な再生産（諸力ならびに諸関係の固定化）こそが義務づけられていた。「（アジア的，ローマ的，ゲルマン的等の）これらすべての共同体の目的は，維持（Erhaltung）ということである。すなわち共同体を構成する諸個人を所有者として，すなわち同一の客観的実存形態において再生産することである」[21]このような時代においても，なおかつ物質的生産の進歩が生じざるをえなかったのは何故か。マルクスは次のように述べている。「再生産の行為それ自身の内部においては」「生産者は自分のなかから新しい素質をひき出し，生産によって自分自身を発展させ，改造し，新しい力や新しい観念を形成し，新しい交通様式，新しい欲望，新しい言語をも形成して，みずからを変化させる」[31]すなわち生産の発展の為には，新しい欲望，より高い生産能力，交通等々が必要であるが，それらは既存の生産活動それ自身によってつくり出される，というのである。ところでマルクスははかかる生産行為それ自体が生ずる為の条件については，次のように述べている。「あまりにも豊かな自然は」「人類自身の発展を，自然必然性たらしめない。」「資本の母国は，植物の繁茂する熱帯ではなくて，むしろ温帯地方である」[32]と。

かくしてわれわれは，コントならびにマルクスにおいて，知的あるいは物質的進歩が，一般法則に初期条件を投入することによって説明されているのをみい出す。したがってそれは，「前科学的な」無条件的趨勢であるわけではない。しかしそれは通常の条件的趨勢とは異なって，殆んど不可避的な趨勢である。何故ならそれは，自然環境がもはや進歩を「必然」たらしめなくなるか，もしくは人間性の構造が変化しない限りは，持続しつづける過程だからである。われわれは，この二つの留保条件をつけた上で，それを不可避的不可抗力的なものと呼ぶ。われわれは，それを宿命的過程と呼びえないわけではないが，それはいわゆる宿命，すなわちわれわれと無縁であり，われわれの願望をたえず裏切るような，外的盲目的宿命であるわけではないから，この呼称を敬遠する。それはわれわれの改善の欲求を通じて実現され，しかもそれを充足するものに他ならないのである。

さてコントもマルクスも，先の如き条件をみたす範囲内における外的自然の特殊的な様態や，政治的国家の作用は，かかる進歩そのものに影響をおよぼすことはなく，ただその速度

に影響をおよぼすにすぎない，と考えていた。しかしそれらが速度に影響を及ぼすものであるが故に，「人類の現状をみてみると，ニュージーランドの未開人からフランス人，イギリス人に至る迄，地球上の各所に，あらゆる文明の程度が共存しているという事実」(33) がみい出されるのである。コントもマルクスも，進歩を一般法則によって，すなわちいかなる人間社会にも妥当する法則によって基礎づけていたが故に，かかる共存的な異質諸社会は「時間的継起の序列」において理解されることが可能になる。だが「時間的継起の序列」それ自体は，どのようにして確定されるものなのか。最先進国民の歴史をみることによってであろうか。だが一つの国民の歴史は，外的諸事情の影響によって，決して純粋な形における進歩を示さない。コントならびにマルクスによれば，われわれはむしろ世界史をみることによって，かかる序列を確定すべきなのである。すなわちコントによれば，「あれこれの国民の真の継承者は，その居住する土地やその属する人種が何であれ，かれらの努力をうけつぎ，社会的進歩をさらに一歩先に推し進めた国民」(34) とみられるべきなのである。又マルクスの「大づかみにいえば，アジア的，古典古代的，封建的，近代ブルジョア的な生産様式が，経済的社会構成体の継起する諸時代として示されうる」(35) という立言は，マルクスも又コントと同じように考えていたことを表わしているであろう。何故なら，かかる諸生産様式は，まさに「地域を異にして」あらわれているものに他ならないからである。

さてコントやマルクスの社会発展法則は，相互に交通しあうことによって発達してきた異質的な人類諸社会の総体を，抽象的に一社会とみることによって，あるいは論理的には同じことであるが，実在的な一社会から，その人種的地理的な特殊性のみならず，その対外交通をも捨象することによって，えられたものである。両者が論理的には同じことになるというのは，人類諸社会は総体としては，もはやその外に対する交通を営むものではないからである。われわれは，かかる孤立的な一社会においてはじめて，その発展の連続性を——ただし内発的＝自生的な発展という意味での連続性を，想定することが可能になるであろう。そしてわれわれは，かかる連続的な発展の内容にかんする事実資料を，まさに世界史のうちに，そしてそこにのみ，求めうるという訳である。何故なら，個々の社会は，対外交通の影響によって，決して連続的な発展を示さないのであるが，他方人類史は，総体としては，先に述べた意味での連続的な発展を遂げることは，明らかだからである。

したがってコントやマルクスの社会発展法則は，諸社会史の間に「平行関係」をみい出すことによって定式化される所の，いわゆる「経験法則」ではなく，あく迄も「合理的なフイクション」（コント）であるという点では，マックス・ウェーバーのいわゆる「イデアル・テイプス」に通じるものである。しかしそれは他面では，個々の社会史とは合致しないが，それらの総体においてはいわば「自己を貫徹する」——したがって，その「抽象的な全体像」をあらわす——という点では，たんなる「イデアル・テイプス」とは区別されるのであって，われわれはこの面をも見落してはならないのである。(36)

注

(1) Comte, Plan, (Œuvres tome X) p. 87. 前掲訳書，90頁。

(2) 「社会静学は」「社会諸現象の交感（consensus）もしくは相互依存の研究である。」(J. S. Mill, Auguste Comte and Positivism, Collected Works, X, p. 309)

(3) F. Engels, Werke, 37. S. 494. 邦訳『全集』, 第37巻, 428頁。

(4) カール・ポパー著, 市井・久野訳,『歴史主義の貧困』, 中央公論社, 119～130頁。

(5) Comte, ibid., p. 132. 前掲訳書, 135～6頁。

(6) コントは「有機体の物理学では」「人間精神は, 部分より全体のほうを直接に認識するため, 一般的なものから出発して個別的なものへ降りていく」(Comte, ibid., p. 132) と述べたが, マルクスも同様の見地を示している。すなわちマルクスは,「価値形態」の理解が遅れた理由にふれて,「細胞よりも, 成育した身体の方が, 研究し易い」(Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 6.) からであると述べた。又マルクスは『経済学批判』の「序言」において「ひとたび自分のものになってからは, 私の研究(すなわち資本主義分析——引用者) にとって導きの本となった一般的結論 (すなわち人類社会発展についての全体認識——引用者)」(Werke, Bd. 13. S. 8.) について語ったのであった。

(7) たとえば, 小室直樹「構造機能分析の論理と方法」(『社会学構座』, 東大出版会, 第一巻) をみよ。

(8) Comte, Cours, (Œuvres, tome IV.) p. 517. 前掲訳書, 290頁。

(9) Comte, Plan, (Œuvres tome X.) p. 102. 前掲訳書, 106頁。

(10) Comte, Cours, (Œuvres, tome IV) p. 522. 前掲訳書, 293頁。

(11) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie (Werke, Bd. 13)S. 8. 邦訳,『全集』, 第13巻, 6頁。

(12) Comte, Plan, (Œuvres, tome X) p. 88. 前掲訳書, 91頁。なおこれにつづけて「これは優勢な社会的勢力が, ついには必ず支配勢力となるという意味である」と述べられている。

(13) Marx, Werke, Bd. 27. S. 452. 邦訳,『全集』, 第27巻, 390頁。

(14) F. Engels, Werke, Bd. 39. S. 206. 邦訳,『全集』, 第39巻, 186頁。

(15) Comte, ibid., p. 64. 前掲訳書, 67頁。

(16) ところで「社会的意識」は, 他から全く独立に発展するものであろうか。否である。コントは人間達の諸々の物質的欲求こそが, 人間精神の発達を促すものであることを, よく知っていた。コントは次のように述べている。「動物のうちでもっともすぐれた存在である人間にあっても, 知的能力の強さは明らかに劣っていて, その継続的活動は, きわめて低俗な情緒的能力から, 強い刺激をうける必要がある。」(Œuvres, tome, IV, p. 438) しかしこのことは,「社会」は意識的産物なのであるから, その発展は「社会的意識」の発展によって響導される, という事情を何等変更するものではない。この意味で (そしてこの意味でのみ) コントは「社会の歴史は主として人間精神の歴史によって支配されている」(ibid., p. 519) と述べたのであるが, スペンサーはこれに対して,「情念」や「利害」こそが支配者である, と言って反論した。そこでミルはコントを弁明して次のように述べている。「人間の知的信念が人間の行動を決定するのではないということは, 船はスチームによって動かされるのであって, 操舵手によって動かされるのではない, というに等しい。なるほどスチームは動力である。」「しかし船がいかなる方向に, どこへ向って進むべきかを決定するのは, 操舵手の意志と知識である。」(Mill, ibid., p. 317.) すなわち世俗社会発展の動力は, 情欲や利害等々であるが, その嚮導者は「社会的意識」だ, というのである。

(17) 「世界史のなかでは人間の行為の結果として生じるものは, かれがめざし, 求めたもの, かれが直接に意識し, 又意欲したものとは全くちがったものである。」(Hegel, Werke, 12. S. 42.)

(18) Engels, Werke, Bd. 39. S. 206. 邦訳,『全集』, 第39巻, 186頁。

(19) 「社会の成員が, そのなかで自分が生活している社会関係の総体を, なんらかの原理によってつらぬかれた, なにか確定的な, 全一的なものと考えたことは, かつて一度もなかったし, いまでもない。反対に, 大衆はこの社会関係に無意識に順応する」(レーニン,『「人民の友」とは何か』, 国民文庫 14～5頁) のである。。

(20) 「世界経済における各々の個々の生活者は, 自分が生産技術にこれこれの変化をもたらしている, ということを意識しているし, おのおのの経営者は, 自分がこれこれの生産物を他の生産物と交換し

ている，ということを意識しているが，しかしかれらの生産者やこれらの経営者は，かれらがこのことによって社会的存在を変化させていることを，意識してはいない。70人のマルクスでも，資本主義的世界経済のなかで，そのすべての部門におけるこれらすべての変化の総体をとらえることはできない。せいぜいこれらの変化の法則が発見され，これらの変化とその歴史的発展の客観的論理が，主要なかつ基本的な点で示される」(レーニン『唯物論と経験批判論』，国民文庫，(2)，456頁)にとどまる。

(21) したがって「唯物史観」における「上部構造と下部構造との関係」は，「有機的統一体における主導的契機」の問題なのだという広松渉氏の見解は，狭すぎる，否はっきりといえば誤りである。(同著，『唯物史観の原像』，三一新書，110頁。)

(22) J. S. Mill, A System of Logic, Ratiocinative and Inductive, (Collected Works, vol. VIII.) p. 925.

(23) コント＝マルクス的思考をもって「前科学的な」「優越要因説」と批判する人も，どこかから説明をはじめざるをえない。これらの人々においてはそれは「外生変数」という名称で呼ばれる所の外因なのであって，すなわちは最も素朴な「優越要因説」におちいっているわけである。(小室直樹，前掲論文，を参照せよ。)

(24) 「それは無活動あるいはまったくの運命論を教えているわけではない。」(カール・ポパー，前掲書，84頁。)

(25) 以上の議論については，ポパー，前掲書，第27節，第28節をみよ。

(26) Comte, Cours, (Œuvres, tome IV) p. 383.

(27) Comte, ibid., p. 447. 前掲訳書，249頁。

(28) Comte, ibid., pp. 437～8, 前掲訳書，243頁。

(30) Comte, ibid., p.498. 前掲訳書，279頁。

(31) Marx, Grundrisse, SS. 393～4. 前掲訳書，第三分冊，428頁。

(32) Marx, Das Kapital, Bd I. S. 536. 前掲訳書，第一巻，下冊，810頁。

(33) Comte, Plan, (Œuvres, tome X.) p. 130. 前掲訳書，134頁。

(34) Comte, Cours (Œuvres,tome IV) p. 291.

(35) Marx, Zur Kritik (Werke. Bd. 13) S. 9. 邦訳『全集』，第13巻，7頁。

(36) 筆者の理解によれば，ウェーバーの『イデアル・テイパス』は二面的な性格をもっている。すなわちそれはコント＝マルクス的思考を，一面では補完するものであるが，他面では拒否するものである。ウェーバーによれば，①われわれは種の規定において，その種に属する個体の総体をとりあげて，たんにそれらの共通性を抽象することによって，それの規定を行うこともできるが，その種を最も純粋に代表する個体(テイプス)をとりあげて，それの規定を行うこともできる。②しかも実在の個体は最も純粋なものといえども，なんらかの不純性を残すものであらざるをえないから，純型は畢意観念的なものであらざるをえないというのである。ウェーバーの以上の論点は全て正しく，晩年のエンゲルスも次のように述べている。「この二つのもの，すなわちある事柄の概念とその実在とは，たえずたがいに接近しながらも，けっして重なることのない二本の漸近線のように，並行関係にあります。この二つのものの差異は，概念がずばりそのまま実在ではなく，実在はずばりそのまま概念ではないこと，まさにこのことを示す差異です。」(「いったい封建制度は，かつてその概念に一致していたことがあったでしょうか？」) (Werke, Bd. 39. SS. 431～2) ところで『イデアル・テイプス』は，因果帰属の年段としては，「発展のイデアル・テイプス」でなければならないが，コントならびにマルクスの発展段階論は，一面からいえばまさに「発展のイデアル・テイプス」であった。すなわちわれわれは，純粋な形における発展を論理的に構成しておくことによってはじめて，特定の国民の特定の自然環境や，特定の外的影響の因果的意義を評価しうるのである。

しかしウェーバーの社会科学方法論の固有の狭隘性は，社会科学の目標を限定したことに由来す

る。すなわちかれは，個性的な事象（あるいは事象の個性的側面）の因果帰属のみを，社会科学の認識目標とした。したがって『イデアル・テイプス』は，かかる目的に対する手段としてのみとらえられている。だが人類全体がどこからどこへへ向っているのか，を明らにすることも又，われわれの目標の一つでなければならない。しかるにウェーバーは，その方法論においては，この問題自体を拒否し，『発展のイデアル・テイプス』がたんに認識手段であるにとどまらず，それ自身認識目標（「世界史の抽象的なる全体像」）たりうることを，原理的に否認している。

結

〔9〕 これ迄筆者は，コントとマルクスの社会発展論をとりあげ，その論理構造（発生・発展・没落の弁証法的論理，「終末論」，「全体論」，「優越要因説」，「宿命論」）が基本的に同一であり，しかもそれが批判的吟味にたえうるものであることを明らかにしてきた。したがって前世紀の社会科学を特徴づける思考様式をもって，根本的に非科学的なものであったとみるような謬見は，是正される必要がある。今日における社会科学の方法は，むろん前世紀の遺産のみにもとづくものであっては不充分なのであるが，しかしその拒否の上にではなく，その継承の上にきづかれるものでなければならないであろう。

さらにコントの「実証主義」とマルクスの「合理的な姿」における「弁証法」とが，まさに対極をなすものであるかのような誤解，すなわち一方が「肯定の哲学」であり，他方が「否定の哲学」であるかのような誤解(1)は，すみやかに一掃されるべきである。「実証主義」は，すべての事物を相対的なものと理解するのであるが，その相対性のゆえんを（少くとも人間史にかんしては）当該の状態が前提せざるをえない否定性のうちにみい出すものだったのであり，他方「合理的な姿」における「弁証法」はあく迄も「頑固な事実」から，したがって又肯定から出発するものに他ならなかったのである。

両者の相異はただ①コントが不可知論的立場をとり，さらに人間史にかんしては（知的活動と物質的生産活動の関係，および社会的意識と社会的存在の関係にたいしては）観念論的な見地にたったのにたいして(2)，マルクスが，首尾一貫して唯物論的立場にたっていた点，および②両者の社会発展論の経験的内容が，かれらの時代認識の相異を反映して，コントにおいては（プルドンとの対比でいえば）いわば「大ブルジョア的社会主義」とでもいえるものに帰結するものであったのに対し(3)，マルクスのそれはまさに「プロレタリア社会主義」と不可分に結びつくものであったという点，これら二点に限られるのである。

注

(1) たとえば『理性と革命（Reason and Revolution）』における，マルクーゼのコント解釈をみよ。

(2) ただしコントが知性の発達をもって産業の発達を主導するもの，とみた点が観念論的だというのではない。この点については唯物論者も同一の認識をいだいている。すなわちエンゲルスによれば，「脳とそれに隷属している諸感覚の発達，ますます明晰さをましていった意識，抽象および推理の能力の発達は，労働と言語とに反作用して，この両者にたえず新しい刺激をあたえて，それらのよりいっそうの発達をうながした」（Werke, Bd. 20. S. 448）のである。問題は，知性の発達が究極的には手の解放すなわち労働の結果である，とみるか否かである。

(3) コントは「自由競争」を過渡的なものとみ，したがって将来社会における社会化された生産を展望していた。しかしかれは「固定的分業」を，すなわち精神的労働と物質的労働，指揮労働と被指揮

労働との間の固定的分業を，人間性に合致した永遠的究極形態とらえていた。そこからかれの，将来社会における「精神的権力」と「産業的権力」の並立，という展望が生まれたのである。しかも「産業的権力」の頂点にたつものは，「三名の銀行家」であったのだから，コントは銀行家による自由競争の廃止という，実現不可能なユートピアを描いていたことになる。

Summary

The Logical Structure of Social Development Theory
——Comte and Marx——

Hisatsugu MURAI

The main purpose of this article is to analyze the logical structure of social development theories of Comte and Marx. The reason why I pay particular attention to the logical structure of those theories, is that not only the empirical contents but also the logicol structure (or the mode of thought) of those theories, are nowadays criticized as "prescientific", for example, by Karl Popper. Furthermore the reason why I compare the theory of Comte with that of Marx, is that in spite of the opposite characters seen among their empirical contents, their logical structure is, according to my interpretation, identical.